

大宮教会 礼拝 特伝説教原稿

辻 幸宏

日 時：2016年4月24日

説教題：「生きる喜びを求めて」

聖 書：(新約) ヨハネによる福音書8章1～11節

マタイによる福音書19章16～24節

I. 序

①今の「喜び」と将来の「希望」

テーマを「生きる喜びを求めて」としました。「喜び」は「今」感じることです。しかし、この「喜び」が「いつまでも」に続く、「喜び」が「絶望」に変わらないことが明らかになる時、私たちは、本当の意味での生きる喜び、つまり「平安」、「安らぎ」そして「希望」をもって生きることが出来るのです。

②苦しみの中に、喜びと希望を求めて生きるとは…

日本社会を見ていると、非常に住みにくい時代になっていると思います。特に、若い人たちにとっては、働くのも、生きていくのも大変な時代だと思います。不安にもなります。だからこそ、今だけでも「楽しみ」、「喜び」を持って生きていたいという人が多いのではないかと思います。

東日本大震災が発生してから5年が経とうとしている今であっても、避難生活が強いられている方々、仮設住宅に暮らしている方々もいます。また、熊本を中心とした地震が発生し、多くの方々がまさに今避難生活を送り、将来を見渡せなくなり、希望を失った人も、少なくないかと思います。

しかし、今、現実には、地上において生きているのです。日々の「喜び」を持って、将来の「希望」を持って歩み続けたいと思うのが、私たち皆が思っていることではないでしょうか。

その中にあって、先程、聖書を読んでいただきましたが、神さまが私たちにお与え下さった神の御言葉である聖書は、すべての者に「生きる喜び」があること、「将来の希望」があることを、私たちに語りかけます。

II. 「律法主義」ではなく、「神の愛」に生きよ！

①生きる希望を求める青年

さて、今、二つの聖書のテキストを読んで頂きました。マタイ福音書に記されているイエスさまの所に近づいてきた青年は、金持ちでした。彼の家族が金持ちだったのか、彼自身が事業に成功して金持ちになったのか、聖書は語りません。しかし、多くの富を手にして、名声も手にしていたのではないのでしょうか。彼は、掟を守り、人々からも称賛されていたのではないのでしょうか。しかし、彼には生きる喜び、平安がなかったのです。不安で不安で仕方ありませんでした。神さまによる救い、永遠の生命を手に入れることが出来なかったからです。そして、平安を得るために、イエスさまの所に来て、永遠の生命を得るためにはどうすれば良いのかと聞いてきました。おそらく彼は、イエスさまに、「あなたはもう十分に神さまの救い、永遠の生命が与えられている。十分である」と語ってもらい、安心を得たかったのだと思われます。

②掟を守る熱心さ

ここで彼は掟を守っていると語ります。18～19節ですね。「⑥殺すな、⑦姦淫するな、⑧盗むな、⑨偽証するな、⑩父母を敬え、また、Ⅱ隣人を自分のように愛しなさい」。皆さまのお手元に十戒を配って頂きましたが、十戒に記されている後半部分、第五戒から第九戒の部分が順番を変えて語られています。そして彼は十戒に記されていることは、前半第一戒から第四戒に記されている神さまを信じることにしても、一生懸命守り、神さまを礼拝していたことだと思います。

③神の愛に生きる、隣人を愛して生きる

しかし最後の「隣人を自分のように愛しなさい」とは、十戒では語られていません。この「隣人を自分のように愛する」ことが、大切なのです。

聖書を開いておられる方は、ページを少しめくって頂き、同じマタイによる福音書22章34節（44ページ）を開いて頂けますでしょうか。聖書がない方は、聞いて頂ければ結構です。ここにユダヤ人の中の律法の専門家がイエスさまに問うている問答が記されています。ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集まった。そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスは言われた。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

最も重要な掟、つまり十戒と言い換えて良いのですが、それは二つありますよと、主イエスは語られます。つまり十戒はこの二つに要約出来るのです。実は、旧約の時代に神さまがモーセに十戒をお与え下さった時に、二つの板に書き記されたものが与えられました。第一の板が、第一戒から第四戒であり、ここで言う第一の掟です。そして第二の板、第五戒から第十戒が「隣人を自分のように愛しなさい」です。父母を敬うのは、父母を愛しているから、殺してはならないのは隣人を愛しているから、姦淫してはならないのは隣人を愛しているから、盗んではならないのは隣人を愛しているから、そして偽証してはならないのは隣人を愛しているからです。「ねばならない」の言葉に騙されてはなりません

長年、教会に来ているクリスチャンでも誤解されている方がいるのですが、掟・十戒と言われれば、「守らなければならない」義務だと思われているかもしれません。しかし、主イエスは、神さまへの愛、隣人への愛を語ります。主イエスが、なぜ、このように語るのかと言えば、もう一度十戒を見ていただきますと明らかになります。十戒は、10の言葉の前に、前文が述べられています。「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隸の家から導き出した者である」。十戒を守ったから救われるのではないのです。十戒が与えられた時、イスラエルは、エジプトで奴隸であった状態から救い出された後です。無条件に救って下さった神さまが、神の民として歩む時に、10の言葉をお語りくださったのです。それは悪の誘惑から守るための神さまの愛から出て来た言葉なのです。

ですから、私たちもまた、「隣人」周りの人たち、すべての人たちを愛することが出来れば、十戒は「ねばならない」ものではなく、隣人を愛するが故に、十戒を守りたくなるのです。

ここで主イエスの前にいる金持ちの青年は、自分は律法を一生懸命守っているつもりでいたのですが、すでに神さまに愛されていることを知りませんでした。愛を知らない人が人を愛することは出来ないのです。そのため彼は、隣人を自分のように愛すること、隣人を思いやる心がなかったのです。だからこそ、すぐ近くに、非常に貧しく、その日を過ごすのも苦しい人々がいるにも関わらず、心の痛みもなく、自分のことばかりを考えていたのです。

そして主イエスは、このような隣人を愛することが出来ない金持ちが救われて天国に入ること、心の平安を入れることは、難しい、と語られます。

神さまの救い、生きる喜び、平安は、自分で獲得できるものではないのです。

Ⅲ. 自らの罪を受け入れよ！

①姦淫の女

そして、今日は、もう一箇所の聖書のテキストを読んで頂きました。主イエスの前には、律法学者やファリサイ派の人々、つまりユダヤ人の宗教的指導者に連れてこられた一人の女の人があります。**姦淫の現場で捕らえられた**と記されています。不倫の現場を捕らえられたのです。現在では、不倫に対しては、警察に捕まるようなことはありませんが、当時は、石打ち、つまり周囲の人たちが石を投げつけることによって殺していく死刑に価する重罪でした。先程取り上げました十戒においても、第七戒で語る「姦淫してはならない」と語られている戒めを明らかに破っているのです。

②イエスを試みるユダヤ人

ユダヤ人たちからすれば、あきらかに律法に逆らっている女は、石打の刑に処せられなければならないと思っていますが、「隣人を自分のように愛しなさい」と語っておられるイエスは、どのように対応するのかを試みるために、女を連れて来たのです。

③あなたは、女を裁く資格がない！

この時、イエスさまは、「**あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい**」とお語りになります。イエスさまは、罪を裁くことが出来る資格があるのは、罪が無い人だけであると言われているのです。

皆さまはどうでしょうか？ 「自分はこのような悪いことはしたことはない」と思っているのです。しかし、神さまは、私たちのすべての行い、口から発する言葉、心の中で考えていることのすべてをご存知です。そして、皆さんも、人に言うことの出来ない恥ずかしいこと、隠しておきたいことは、大なり小なりありますよね。完全に聖く、義しく、真実であります神さまからすれば、どれだけ小さな罪を犯していたとしても、それは死刑に価する罪なのです。だからこそ、みんな死んでいきますよね。神さまが、最初、天地万物を創造された時、最後に人間を創造されたのですが、人間は、神のかたちに、神に似せて創られました。つまり、神さまと共に永遠に生きるものなのです。しかし、ご存知のように、最初の人、アダムとエバは罪を犯しました。神さまとの約束、つまりエデンの園にあった善悪を知る知識の木から木の実をとって食べたのです。それ以来、人は生まれながらに、そして毎日、罪を犯し続けるのです。だからこそ、すべての人が、死んでいくのです。テレビのように、他人の罪を面白おかしく裁く前に、自分自身を顧みることが求められているのです。

「この女を裁こうとしているあなたは、罪がありませんか？」とイエスさまは語っておられるのです。そしてイエスさまは、^{かが}屈んで、地面に何かを書き続けられます。

どれだけの時間、イエスさまは待たれたことでしょうか？ 年長者から始まって、一人また一人と、去って行きます。誰も、彼女を裁くことが出来ないのです。それはここに集う皆さまも、そしてこの私もです。

IV. 神の救いに生きる喜び

①「わたしはあなたの罪を赦す」！

そしてこの場に残されたのは、主なる神さまであるイエスさまとこの女だけです。主イエスは、女に語られます。「**わたしもあなたを罪に定めない。**」

この言葉には大きな意味があります。私たちを含め、この場に集っていた人たちは、誰一人、この女を裁く資格がないのです。そのために裁けなかったのです。

しかし主イエスは違います。神さまであるイエスさまは、この女を罪の故に裁くことが出来るのです。しかしイエスさまは、この女に対して「**わたしもあなたを罪に定めない**」とお語りくださいます。言い換えれば、「**わたしはあなたの罪を赦す**」と宣言し判決を下されたのです。

イエスさまは、罪の故に死刑に処せられるべき人間の罪を赦し、救って下さったのです。ここにイエスさまの神さまとしての愛があります。

②救いの条件：悔い改めと信仰告白（イエスさまを信じること）

最初の律法を一生懸命に守り名声を得ていた青年に対しては愛が足りないと語られた主イエスが、ここでは死刑の罪に定められるべき女の罪を赦して下さいました。両者にどこに違いがあったのでしょうか？ イエスさまは不公平なのでしょうか？

イエスさまが彼女の罪を赦して下さった理由は、たった一つです。初めの金持ちの青年は、自分の罪、自分の不十分さを認めることがありませんでした。自分で救いを獲得しようとしていました。

しかし姦淫の女は、人々の前で見せしめになり、自らの罪の大きさを自覚し、悔い改めを行ったことです。そして、主イエスの前でひれ伏したのです。そしてイエスさまによる罪の赦し、救いを求めたのです。

イエスさまは、この後、ユダヤ人たちに逮捕され、十字架に架けられ、苦しみつつ、死んで行かれました。神の御子である方が、罪がないにも関わらず、罪人として裁かれたのです。この死は、本当ならば、この姦淫の女が背負わなければならなかった刑罰です。そして、彼女を裁くことが出来なかったユダヤ人たち、ここに集い、彼女を裁くことが出来ない私たち一人ひとりのためです。イエスさまの十字架は、あなたの身代わりの死だったのです。

神さまを信じる、キリスト教を信じるというのは、イエスさまが、十戒を完全には守ることが出来ない私の代わって十字架で死んで下さったことを信じることです。

イエスさまは、十字架で死んで、終わりでしょうか？ イエスさまは、十字架の死から三日目の朝、復活し、甦られました。罪に打ち勝たれ、死に勝利して下さいました。そして今、天国におられるのです。

③復活と天国こそ、私たちの喜び、生きる希望！

そうであるならば、イエスさまを神さまと信じ、イエスさまの十字架を私たちが信じるならば、私たちもまた、イエスさまと同じように復活する希望が与えられるのです。復活と天国の歩みは、イエスさまが再びこの世に来られる時、行われます。ここにこそ、私たちの希望があります。

私たちは、どうしても日々の生活、将来の不安もあります。金持ちの青年が得ようとした「救い」という安心、将来の希望を、どうすれば得られるか分からないのです。しかし、聖書の御言葉に聞くことによって、イエスさまを信じるならば、天国に入り、永遠の生命が与えられているのです。

だからこそ、現実を目を向ければ、苦しく、不安もあります。それでもなお、私たちがイエスさまを信じる時、生きる喜びと将来の希望を持って、毎日を歩み続けることが出来るのです。

(お祈り)

イエス・キリストの父なる神さま、聖書をとおして、私たちに語りかけて下さり、ありがとうございます。

今、喜びをもって生きることが出来ない人たちがいます。将来に不安を持ち、希望がもてない人たちがいます。現実の生活、苦しみもだえている人たちがいます。

しかし、主なる神さまであるイエスさまが、私たちに語りかけて下さり、ありがとうございます。イエスさまが、十字架によって私たちの罪を代わりに担って下さり、私たちの罪を赦して下さったことに感謝します。イエスさまが、十字架の死から甦って下さったように、私たちも、復活と永遠の生命が与えられており、感謝します。

どうか、私たちを救って下さり、天国における永遠の生命を信じることにより、ここに集う一人ひとりが、喜びと希望、平安をもって、毎日を歩むことが出来ますよう、お導き下さい。

このお祈り、主イエス・キリストの御名により、お祈りします。 アーメン